

令和2年7月10日(金)

「ICT環境の活用」－予習型学習をめぐる②－

松戸市教育長 伊藤純一

「予習型学習」に関しての発信第2号です。都内あるいは隣接市の学校で休校が相次ぎ、本市においても専門学校でクラスターが発生するなど予断を許さない状況に、警戒を強めながらの毎日で大変だと思います。

その中で、Web会議やWeb研修が実施されていることは皆さんもご承知とされますが、市教委としては、今後、学校と子どもたちがつながるようなICT環境を構築するために準備を進めているところです。

新型コロナウイルスは教育のシステム、学校教育の有り様を加速度的に変えてきています。その一つのICT環境の構築、特にGIGAスクール構想については、市教委としても本年度から4年計画で進める予定でしたが、前倒しをし、本年度中に全児童生徒にタブレットの配布を完了する計画となっています。秋にはクラウドが整備されますが、クラウドに教材を整備することにより、学校ではその教材を使った授業が出来ますし、子どもたちは家庭でその教材により学習することが可能になります。

例えば、松戸市独自の英語教材である『ハートでENGLISH』を家庭で視聴し、英語を予習することが出来るわけです。もちろん復習も出来ます。制作者の一人である大西泰斗教授からは「松戸市の子どもたちが『ハートでENGLISH』を自由に使う時が来るようで嬉しい」とコメントと使用許可をいただいています。

各教科で多くの教材を用意できるようになれば、発信第1号で触れた「多様な学びへの転換」への大きな材料になります。既にいくつかの学校では実践研究の準備に取りかかっていると聞いていますが、予習事項の確認教材、教員の授業動画、復習としての繰り返し教材等様々な用途が予想されます。学校全体あるいは学年で、その活用方法を学ぶことからスタートすることが必要かもしれません。

休校中、保護者の皆さんからICT環境構築による学力向上に関するメッセージをたくさんいただきました。例えば、「双方向でのオンライン授業を実施すれば学習効果は高まる」ということなどです。今回のような緊急時にはICTの活用が学力の維持及び向上策に重要なツールになりそうです。

しかしながら、授業の基本は対面です。人と人の関わりを維持しながらの授業が、多くの効果を生むと私は感じています。対面授業を基本にしながら、ICTをどのように組み込んでいくかが大きな課題です。遠隔授業と対面授業、予習型授業と復習型授業などのバランスをどのように創っていくかという力が問われる時代になりました。あるいは、「オンラインの日」などを設定して、今回、様々な効果を感じている「分散授業」と組み合わせることも、更なる効果を生みそうです。

かなりの急勾配を駆け上がらなければならない状況のICT環境の構築ですが、ICT環境は万能ではありません。あくまで、ツールとしてのICT環境の構築です。これまでの課題解決型学習などの理論を基盤とし、予習型学習等の多様な学びへのサポートシステムとして、ICTの活用が大きく貢献してくれると期待しています。

(次は 学力格差と予習型学習 を予定)